



## もっと個の力を

野部 達夫

TATSUO NOBE

((一社) 建築設備技術者協会 会長, 工学院大学 建築学部 教授)

明けましておめでとうございます。本年も協会会員の皆様のご多幸とますますのご活躍を祈念し、ひとこと年頭の所感を申し上げたく存じます。

昨年は協会創立30周年の節目となり、学生コンペやフォトコンテストには多数の素晴らしい作品が寄せられ、若手からベテランまでの座談会や賛助会員の皆様への感謝の集いなどが挙行されました。また、協会のホームページ上にJABMEEナレッジマップが本格稼働し、新年からはホームページもバージョンアップされます。今年もこれらの記念事業を通じて頂戴した貴重な意見を踏まえ、協会の活動を推進していきたいと考えております。

さて、毎年、建築設備士の日の鼎談を会長・副会長とゲストという組み合わせで行っておりますが、一昨年はラグビーワールドカップの前年ということでラグビーに造詣の深いスポーツライターの方を、また、昨年の鼎談には海外を主戦場とするプラント会社の経営者の方をお招きしました。二人とも世界を飛び回って仕事をされていますが、そこで話題に上ったのは日本の中間層の厚さと優秀さでした。俗に2:6:2の法則などといいますが、6割を占める中間層は困難な仕事も卒なくこなし、組織を力強く支えています。しかし、鼎談で皆様が異口同音に指摘されたことは「個の力」の弱さでした。一人一人は協調性が高く優秀ではあるものの、ものを考えない習慣が身につけてしまっているとも。

この遠因は、江戸時代に官学であった朱子学に遡るのかもしれませんが。幕末の開国の交渉で来日した諸外国の人々は、交渉役の役人が皆自己の判断を避け、上意下達に徹していたと指摘しています。今でも「ホウ

レンソウ」が組織人の作法とされ、江戸時代のまかもかもしれません。更に、現在は上層の2割といえども自分で考える人が少ないのではないかと危惧しています。上役の判断も、状況が変わればあっけなく覆ってしまうことを歴史は物語っています。

話は変わりますが、先日ひょんなことから「好きなことはやらずにはいられない 吉阪隆正との対話」という本を読みました。吉阪はいうまでもなく当時多数の若者を心酔させた建築家でありましたが、探検家・登山家であるとともに地球を股に掛ける文明批評家でもありました。そこには1958年の朝日ジャーナルに寄稿した「オペラ歌手」と題する小文が載っておりまして、「オペラ歌手は、恋する心を失ったとき声が出なくなるといわれている。建築家は人類の生活への情熱を失ったとき、一介の技術者になってしまう」と。

一介の技術者たる我々には耳の痛い話です。建築家は日夜恋と同じく仕事にも情熱を傾けます。これは奮励努力の賜ではなく、本の題名の通り「好きなことはやらずにはいられない」という、建前の対極にある態度であり、得失を超越した一途な思いと職能が合致した場合に人びとのリスペクトが宿るわけです。建築設備技術者の地位向上が標榜されて既に久しく、昨年の年頭挨拶でもその一考察を書かせていただきましたが、吉阪の言葉は大いにヒントになります。

本年も建築設備六団体協議会（空気調和・衛生工学会、電気設備学会、日本空調衛生工事業協会、日本設備設計事務所協会連合会、日本電設工業協会及び建築設備技術者協会）と共に、建築設備という仕事のやり甲斐を創出していきたいと思います。本年もどうか宜しくお願い申し上げます。